
オトモは大変な戦争に召喚されたようです

愛・アイルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オトモは大変な戦争に召喚されたようです

【Nコード】

N3745Q

【作者名】

愛・アイルー

【あらすじ】

紅い弓兵の変わりに凜が召喚したのは——オトモアイルー！？

猫成分120%でお送りする聖杯戦争、始まります。

この小説は、ご都合主義、オリジナル主人公（しかも畜生）、

独自解釈、キャラ崩壊、猫無双展開などを含みます。

また、更新は不定期で、作者の文章力は小学生並みです。

それらに嫌悪感、不快感を抱く方は見ないことをオススメします。

それでもいい、という方のみどうぞ。

プロローグ（前書き）

短いですが、プロローグです。

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

ブローグ

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ」

——聖杯聖杯。

「繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する」

ここ、冬木市で行われる儀式。全ての願いを叶える『聖杯』を求める七人のマスターと七騎のサーヴァント達による争奪戦。

「告げる。

汝の身は我が下に、わが命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

マスターはサーヴァントを召喚、使役し、聖杯を手に入れるために殺しあう

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者
汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ。」

そしてここ遠坂邸では一人の少女——遠坂凜——が今まさにサーヴァントを召喚しようと儀式を執り行っていた。

「我に従え！ならばこの命運、汝が剣に預けよう！」

強烈な光があふれ、空間に満ちた魔力が収束していく。

成功した——そう確信する少女。やがて光が収まり、目を開けた少女の前にいたのは——

「え？」

「にゃ？」

——可愛いらしい猫だった。

「つて、なんでよおおおおお——」

夜の町に少女の叫びが響きわたった。

凜
side

「……つまり、あんたが私の召喚したサーヴァントってわけ？」

あの後、なんとか落ちて着いた私は、目の前にいる猫に訊ねた。

「そうニャ。ニャンター（狩猫）のサーヴァント、召喚に応じ参上したニャ」

「ニヤンター？何そのふざけた感じのクラス名は」

「ふざけた感じとは失礼ニヤ！オトモアイルーの中でも選ばれた者しか慣れない、とてもスゴいクラスなのニヤ！」

「い、いめんざい」

「どうやら彼は、そのクラスであることに誇りを感じているようだ。」

あまりの剣幕に思わず謝ると、ニャンターは満足そうに頷いた。
そこでふと、先ほどの会話で聞き慣れない単語があるのを思い出し、
聞いてみることにした。

「ねえ、ニャンター。あなたさっき『オトモアイルー』って言うて
いたけど、それってなんなの？」

「ニヤ、オトモアイルーというのは――」

そこから説明された内容は驚きの連続だった。

なんとニャンターは異世界で活躍した英霊だという。それだけでも
驚愕なのに、その世界では、幻想種の頂点であるはずの竜種が普通
に自然の中で暮らしてたり。村や町、個人の依頼などでその竜種と
戦う『ハンター』という職業の者達がいるだとか。アイルーという
種族がいて、お店の手伝いをしたり、狩りに同行したりするのだと
いう、どこのゲームかマンガだ！という、信じがたい内容だった。
しかし、なによりも信じがたいのは――

「で、あなたはそのアイルーって猫たちだけでモンスターを狩るニ
ャンターって存在だった、と？」

「そうニヤ」

にわかには信じがたい。というか信じられない。

この目の前にいる普通の（２本足で立って、喋ってるけど）猫にし
か見えないニャンターが、竜種と戦って勝つ光景など、全く思い浮
かばない。

「……なんか、いまいち信じられ無いつて顔してるニヤ」

考えていることが顔に出ていたのか、ニャンターがジトつとした目でこちらを見てきた。

「うつ……だ、だって仕方ないじゃない。どう考えたってあなたが竜とまともに戦えるとは思えないんだもの……」

「そう思うならステータスを見てくれニヤ。そうすれば納得できるニヤ」

ニャンターに言われ、ステータスを見る。

「っ！？これは…！」

「ニヤ、少しは納得できたニヤ？」

納得した。ニャンターのステータスは悪くないどころか、申し分ないと言えるくらい良かった。

「これなら、聖杯戦争も問題なくいけるかも」

「分かってくれたならいいニヤ。ところで旦那さん、旦那さんの名前はなんていうニヤ？」

「え？あ、そういえば自己紹介してなかったわね。私の名前は遠坂凜よ。あなたは？」

「タルトっていうニヤ。よろしくニヤ、旦那さん」

と言って右手を出してきたので、その手掴みながら――

「こっちもよろしく、タルト」

——こうして、可愛らしくも頼もしいサーヴァントと私の聖杯戦争が始まった。

凜 side out

猫のステータス（前書き）

別に見なくても問題ありません。

若干ネタバレ（宝具とか）を含むので注意して下さい。

猫のステータス

マスター 遠坂凜

クラス ニャンター

真名 タルト

属性 混沌・善

筋力 C (B) 魔力 E (D)

耐久 D (C) 幸運 B (A)

敏捷 A (A+)

() 内はスキルによる補正を受けた後の数値。

クラス別スキル

竜殺し A 竜の性質をもつ相手と戦う時、相手の筋力と敏捷の値を下げる事が出来る。Aならワンランク下げることが可能。

騎乗 D 馬を操る等の騎乗能力。幻獣は不可。

一時撤退 EX 一定以上のダメージを受けると撤退して回復を計る能力。このレベルだと、魔力が供給されている限り消滅することはない。

固有スキル

猫の英雄 A + 全ての猫達から讃えられるべき偉業をなした存在。自身のみならず、この世に猫という存在が認知されていれば世界から補正がかかる。

この世界では全てのステータスがワンランク上がる。

宝具

謎多き小箱

(ニャンター・ポーチ)

ランク E→A

レンジ 1

対自宝具。アイテムボックスに繋がる不思議なポーチ。ゴミ同然のガラクタから宝具級のレアアイテムまで多数揃っている。

桃花彗星

(プーギー)

ランク E

レンジ 1

対人宝具。プーギーを召喚して乗る。陸路はもちろん、空中も高速で移動できる。

が、攻撃力は無いに等しく事実上逃げ専用。

無窮なる疾走

(ガーグア・チャリオット)

ランク C

レンジ 1→10

対人宝具。自分を含めた最大4匹までのアイルーを召喚し、ガーグアの引く戦車に乗って突撃、及び荷台から爆弾やブーメランで攻撃する。プーギーと違って空中は走れない。なお、召喚されたアイルー達は、Dランク程度の単独行動スキルを有している。

夢想束ねし曙光

（ギルドネコカリバー）

ランク A +

レンジ 1

対人宝具。真の勇者にのみ授けられる一振り、とされている聖剣。その刃は心に呼応して、鋭さを増す。

戦友と行く無限の狩生活

（ニヤンタークエスト・レベルインフィニティ）

ランク EX

レンジ 1 ～ 1000

対軍宝具。果てしなく続く平原のような風景の固有結界内に、数千匹のアイルーを連続召喚する。

この結界内においては全てのアイルーが、Dランク相当の一時撤退と単独行動のスキルを所持しており、倒される前に戦線を離脱、回復とともに復帰する。まさに猫無双。

補足：アイルーの英霊。牙獣、飛竜、果ては古竜までをも単身討伐したとてつもないアイルー。毛並みは隠密。

ギルドとも個人契約を結んでおり、オトモアイルー達の間ではカリスマ的存在。オトモ、野良に関わらずアイルーからの人望（猫望？）が厚い。

前の主人を狩りの途中に亡くしたため、今度の主人である凜を最後まで守りぬくこと、そして受肉して座敷猫として暮らすことが願い。

第1話：猫、初戦闘。（前書き）

場面が飛ぶのは仕様です。

第1話：猫、初戦闘。

「なんだよ。消しちまうのか、もったいねえ」

「っ!？」

後ろを見た凜の目につつたのは、青い服を着た男だった。

「まさか、サーヴァント!？」

「そういう嬢ちゃんマスターは俺の敵かい？見たところサーヴァントはいねえようだが」

「失敬ニャ!!サーヴァントならちゃんとここにいるニャ!」

傍らにいる自分をサーヴァントではなくただの使い魔だと思った敵サーヴァントに対して憤慨するタルト。

……もつとも、見た目猫の妖精ケットシーなタルトを、見ただけで英霊と分かれ、という方が酷だが。

「は！？………って言われてみりや確かにサーヴァントの気配だが、ケットシーの英霊なんざ聞いたこともねえぞ」

「ケットシーじゃなくてアイルーニヤ」

「アイルーだあ？聞いたこともねえな……まあいい、とりあえずてめえがサーヴァントってんなら、やることは一つだけだ」

そう言いどこからともなく赤い槍を取り出すサーヴァント。

「ランサー（槍兵）……」

「ま、さすがにバレるか」

まんまだしな、と言い槍を構えるランサー。

「（旦那さん、どうするニヤ？）」

「（ここじゃ狭すぎる。一度グラウンドまで逃げるわよ）」

「（了解ニヤ）」

念話で話した後、素早く駆ける凜とタルト。
しかし――

「ハッ！逃がすかよ！！」

ランサーの槍による一閃がそれより早く凜に迫る。

「（くっ、避けきれな…！？）」

その時猛スピードで接近してきた謎の物体が――

「え？…げふうつ！？」

――凜の鳩尾にぶち当たった。

「クッション頼むニヤ、プーギー！」

タルトの指示を受けプーギーと呼ばれた物体――可愛らしいピンクの子豚――が、吹っ飛んだ凜を追いかけに行った。

「……いや、攻撃したオレが言うのもなんだがよ。もうちょっとやり方ってモンがあったんじゃないかねえか？」

「ニヤ、確かに……。ガーグアを使った方がもつと飛んだニヤ」

「いや、そういう問題じゃねーだろ……」

どこかズレた反省をしながら、先にグラウンドに行った（落ちた？）凜のもとへ向かったタルトを、少し疲れた顔で追いかけるランサーであった。

~~~~~

グラウンドの真ん中で互いに武器を構え対峙するサーヴァント達、と凜（若干グロッキー気味）。

「そっぴやてめえ、クラスは何だ？」

「ニャンター（狩猫）ニヤ」

「ニャンター？ なんだかふざけた感じのするクラス名だな」

「ふざけた名前とは失敬ニヤ！ ってこのやりとりデジャブニヤ……。もしかして、これから名乗るたびにこれを繰り返すのかニヤ？」

そっぴい、タルトは地面にのの字を書き出した。

「あー、その、なんだ。悪かったって。元気だせよ、な？ 良い名前だよ、ニャンターって」

あまりの居た堪れなさに、思わずフォローするランサー。

「……こんな感じで大丈夫かしら、聖杯戦争」

一人、蚊帳の外に置かれた凜の呟きに答える者は、誰もいなかった。

「……もう大丈夫か？ 大丈夫だってんなら、そろそろ始めたいんだが」

なんとか回復したタルトにそう問いかけるランサー。

「大丈夫、答えは得たニヤ。ボクはこれから、頑張っていけるニヤ」

「ヤ」

それに対して、色々とエンディングなセリフで答えるタルト。どこことなく、朝日が昇ってきたら消えそうな雰囲気放っている。

「そうかい、なら始めるか」

「おうニヤ」

ランサーが槍を構え、タルトも剣をもち、鎧の役目をする服を着る。

その姿——レイピア状の剣を構え、つばの広い赤い帽子を被り、貴族のような赤い服を着ている——は、どこか中世の騎士か剣士を思わせる。

「…行くぜ、ニヤンター」

「どんとこい、ニヤ」

そして、両者が同時に踏み込んだ——

〈凜side〉

目の前でランサーとタルトが戦っている。

最初タルトが戦えるのかどうか不安だったが（いくらステータスが良くて、あんな外見だし）、そんな心配は無用だったようだ。

ランサーが次々と繰り出す攻撃を軽く避け、時には手に持った剣で弾き、いなしていく。

「ハッハア！やるじゃねえか、ニャンター！」

「そつちもニヤ！」

そう話す間にもますますランサーの攻撃は激しくなり、突き以外にも風ぎ、払い、打ち下ろし、と多彩な技で攻めてくる。対するタルトもさらに早さを上げ、ランサーの攻撃をしのぐ。

やがて、このままでは距離を詰められると思ったのか、ランサーは一度槍を大きく払ったあと、後ろに跳んでタルトとの間合いを開けた。

「最初は猫なんぞがと思ったが、なかなかどうして。やるじゃねえかニャンター」

「当然ニヤ。このくらいできなきゃニャンターは勤まらないニヤ」

「そうかい……できるならもう少しやり合つときたいんだが、ウチのマスターがそろそろ切り上げてこいなんてぬかしやがるんでな。悪いが、次でケリ付けさせてもらっぜ」

ランサーがそう言うと同時に、手に持っていた槍へ魔力が集中する。たったそれだけのことで場の空気が急激に下がった気がした。同時に思う、あれは避けられないと。

あれを撃たせたらタルトが死んでしまっ、そんな思いが頭をよぎった瞬間――

「誰だ!!」

——突然ランサーが叫んだ。

よく見るとフェンスの向こう側に誰がいる!?

「ちっ、ニヤンター!この勝負一旦預けるぜ」

そう言いどこかへ向かったランサー。いけない!

「タルト、ランサーを追って!私も後から行くわ!」

「分かったニヤ!」

言っやいなやどこからか出てきたピンクの子豚に乗ってタルトは飛んでいった。

私も早く追わなきゃ!

＼凜side out＼

校舎内を逃げる少年に追い付いたランサー。

「悪いな、目撃者は消せってマスターから命令されてるんでな」

ランサーの槍がまさに少年の心臓に刺さろうかという時。

「ちょっっつと待つニヤ~~~~~!!!!!!」

プーギーに乗って疾走してきたタルトが――

「へ？…ひでぶっ！？」

――少年の鳩尾にぶち当たった。

………というか断末魔？の聲が世紀末な感じだったが大丈夫なのだろうか？

「……いや、今まさに殺そうとしていたオレが言つのも何だけどよ。他にやり方無かったのか？泡吹いてるぞ、ソイツ」

「大丈夫ニヤ、問題無い………はず」

「はずかよ！？」

「まあ、それはどうでもいいニヤ。ランサー、まだ目撃者を殺すつもりなら相手になるニヤよ？」

「……やめておく。ちょうど魔術師も来たみたいだしな。ニヤンター、次会う時は必ず決着をつける。覚悟しとけよ。」

「いつでも来やがれ、ニヤ」

「おう、じゃあな。」

~~~~~

「タルト！目撃者は……って、衛宮君！？」

「気絶してるだけで命に別状は無いニヤ。旦那さんの知り合いかニヤ？」

去って行ったランサーと入れ違いに到着し、少年の安否を尋ねた凜は、タルトの言葉を聞いてほっと胸を撫で下ろした。

「ええ、一応。ところでタルト、ランサーを追ってくれない？マスタアの顔が拠点だけでも知って置きたいわ」

「任せるニヤ」

そう言つてタルトは、プーギーに乗り、ランサーを追いかけて行った。

「さてと、ランサーのことはタルトに任せだし、衛宮君が起きる前に早く帰らないと」

早く寝たいわゝなんて言いながら帰路につく凜。

だが数十分後、この場で犯したうっかりにより、まだまだ眠れない夜を過ごすことになるのを、彼女は知らない。

第2話：猫、魅了する。（前書き）

注意：この回から本格的に猫無双展開やキャラ崩壊が起こります。
苦手な方は今すぐ『戻る』を押して下さい。

第2話：猫、魅了する。

凜 side

「旦那さん、そういえば目撃者はあの後どうしたのニャ？」

家に帰って少したってから、戻って報告（残念ながらランサーのマスターの居場所は掴めなかった）をしたタルトは、ふとそんなことを聞いてきた。

「どつって、見つかったら面倒だから起きる前に帰ってきたけど？」

「記憶操作とかはしたのニャ？」

「……………あつ！」

しまった！衛宮君が無事だって聞いてホッとしたから忘れてた！？

「旦那さん……………」

「し、仕方ないじゃない！それより、ランサーが衛宮君を殺しに戻ってきたら大変だわ！早く行かないと！」

「了解ニヤ……………」

タルトから浴びせられる視線から逃げるように、私は家の外まで駆けて行った。

~~~~~

「旦那さん、ちょっと待つニヤ」

「なに、タルト？急がないと——」

「だから待つニヤ。今『乗り物』を出すから、それに乗るニヤ」

そう言いタルトが手を振ると目の前に『何か』が出てきた。

巨大な、恐らく鳥と思われるものが少し小さめの荷車を引いている。

「さ、早く乗るニヤ」

「え？乗るって、これに？」

タルトの指差した荷車は、猫なら数匹ぐらい乗れそうだが、私に乗るには若干小さいように思う。

だがそうも言っていられない。私は体を縮めながら、荷車に乗り込んだ。

「では行くニヤ！しつかり捕まっているニヤ！」

そう言って合図をした瞬間、車が走り出し――

「って速すぎるわよ！？わわ、落ちる！」

「ニヤッハー！行くのニヤ！『無窮なる疾走』！！」

ガーグア・チャリオット

「さらにスピード上げるな!？」

「ニヤハハハハハ！我が疾走を妨げるもの無し、ニヤ。最大加速！」

「もっ下ろして~~~~!!?」

凜  
Side out  
凜

Side )

目の前で2人の人間が戦っている。

「一つ聞かせろ、貴様の武器、それは剣か？」

「さあな？ 槍かもしれないし斧かもしれない。もしかしたら弓という可能性もあるぞ？」

「ほざけ！セイバー！」

わけが分からない。俺は今日、弓道場の掃除をして遅くなったから帰ろうとしたら物音がして、様子を見に行ったら槍を持った男と、剣を持って服を着た猫が戦っていた。

その、あまりに異様な光景に思わず見入っていると、槍を持った男が凄まじい殺気を放った。それにより、周りの温度が急激に下がったかのような錯覚に陥る。その殺気に思わず後ずさりすると、足元にある小枝を踏んでしまった。

「誰だ！」

マズい、  
気付かれた！

そう思った瞬間、俺はその場からすぐさま逃げ出し、校舎に入ったところ、でそいつに殺されそうになった時――

「ちよ〜と待つニヤ〜!!」

「へ？…ひでぶつ！？」

誰かの声と共に来た、腹への衝撃によって、俺は意識を失った。

目が覚めると、さっきまでのことが夢かなんかかと思えるくらい静かで、どこかスツキリしない気持ちを抱えつつ帰宅した。

その後男が再び襲ってきたので、なんとか土蔵に逃げ延びて武器を探していると、蔵の床が光り――

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した。問おう、貴方が私のマスターか？」

――綺麗な少女が、目の前に立っていた。

（士郎 side out）

「なあセイバー。お互い初見なんだし、この場は一度引いちゃくれねえか？」

その後、少女――セイバー――によって外に飛ばされ、見えな  
い武器に攻めあぐねてた青い男ことランサーが、ふいにそう提案し  
た。

「戯れ言を。敵を打ち取る機会を見過ごせるものか」

だが、セイバーはその提案を一蹴する。

「そうかい、そりゃ残念だ。なら――」

言葉とは裏腹に、好戦的な笑みを浮かべたランサーの持つ槍が赤く

光る。

「その心臓、貰い受ける」

そう言うと同時に疾走し、相手との距離を詰める。  
だがセイバーの方も、それを迎撃せんと構える。

「刺し穿つ（ゲイ）——」

己が宝具をランサーが開放しようとした時——

「——死棘の（ボル）、ぐおあっ!？」

「なに!？」

——衛宮邸の外壁を破壊して突入してきた凜達の乗る戦車によって、ランサーは吹き飛ばされた。

「痛たた。勢い余って壁を突き破ってしまったニヤ。旦那さん、大丈夫——あ、ダメだ気絶してるニヤ」

「きゅっ……」

「ほら旦那さん、着いたニヤ。早く起きるニヤ」

「——!（プルプル）」

「なんでさ……」

気絶した凜と、それを起こそうとするタルト。何かを必死に堪えて

るセイバーと、一人展開に追いつけない士郎というカオスな状況は、この10分後に凜が目覚めることでようやく収拾が着くのであった。

「——というわけで、一度教会に行くわよ」

あの後、とりあえず壊した外壁を直し、衛宮家の居間に上がって自己紹介等をすませた後、士郎に聖杯戦争のあらましを説明した凜は、教会へ向かうことを提案した（ちなみにランサーは逃げた）。

「分かった。セイバーもそれで——セイバー？」

「良い毛並みですね。何か特別な手入れでもしているのですか？」

「特にやってないニヤ。けど一狩り行った後は必ず温泉に入ってたニヤー！」

「温泉ですか……。良いですね。この衣装は一体どこで作られたのです？」

「いつも臍履にしてる加工屋でこしらえてもらったニヤ。なかなか気に入っているのニヤ」

「ええ、ええそれはもう！よく似合っています。あ、肉球触ってもいいですか？」

「どうぞニヤ」

言われた瞬間、『待て』を解かれた犬の如くタルトの肉球を触りだ

すセイバー。とても生き生きしている。

「えーと、セイバー？」

「ああ、この感触。素晴らしい……」

「セイバー！」

「ハッ!? な、なんでしょうかマスター」

「いや、教会に行こうと思うんだけど……」

「分かりました。では私はここでニャンターと留守番「じゃあついでいくニヤ」ええ、もちろんサーヴァントとしてマスターに同行します！」

「……そうか。あ、あとその『マスター』っていうのやめてくれないか。できれば普通に名前で呼んでほしい」

「ではシロウト。ええ、私としてもこちらの呼びかたの方が好ましい」

「話は終わった?じゃあそろそろ行くわよ」

士郎とセイバーの話が終わったのを見計らって、凜が教会へ向かうのを促す(きっちりセイバーからタルトを奪還し、抱えた状態で)。

「ああ、そうだな。ってセイバー、その鎧外せないのか?さすがに目立つぞ」

「ですが、いつ敵に襲われるか分からない以上、外すことはできません」

「けどなあ……あ、そうだ。ちょっと待っててくれ」

そう言い奥に消えた士郎。やがて戻ってきたとき、その手には黄色いカップがあった。

「これを着といてくれ。鎧よりはマシだろうから」

「…分かりました」

差し出されたカップを、セイバーはやや不満そうにしながら受け取り、羽織った。

「……それじゃ早く行きましょう（人目についたら大変だし）」

「（どっちにしても怪しさ満点ニヤ）」

その格好に内心ツツコミつつも、特に口出しすることなく教会に向かう凜達であった。

第3話：猫、勝利する。（前書き）

猫が相手じゃ仕方ない。

この小説はその理屈だけで成り立っています。

### 第3話：猫、勝利する。

「——では、改めて問おう衛宮士郎。選ばれしマスターとしての聖杯戦争を戦う意志があるや否や」

「戦う、俺が俺である限り。戦い抜く！」

教会に来て聖杯戦争の説明を受けた士郎は、参加の是非を問う監督役——言峰綺礼——にそう答えた。

「喜べ少年。君の望みはようやく叶う。正義とは、敵対する悪がいて初めて成り立つものだ」

「っ！？」

教会での用が終わり、扉を出た所で言峰はそう告げ、その言葉に士郎が振り返った時には、教会の扉はすでに閉まっていた。

く士郎 sideく

「それじゃあ私達はこつちだからこれで。今まではつい手助けしちやっただけど、それもここまで。明日からは敵同士になるから」

あれから、聖杯戦争に参加することをセイバーに伝え、了承をもらった後。四人（三人と一匹）で帰っていた途中で、遠坂はそんなことを言ってきた。

「なんでさ、俺は遠坂と戦うつつもりはないぞ」

「はあ、説明聞いてなかったの衛宮君？あなたに敵対するつもりが無くても、聖杯を手に入れられるのが一組である以上、いずれ私達は戦うことになるの」

俺の言葉に遠坂は溜息を吐き、重ねてそう言ってきた。

「いや、理屈は分かるけどやっぱり俺は遠坂とは戦えない。それに――」

「ふむふむ、つまりそのハンターに雇われたオトモアイルーの中でも、とりわけ優秀な者がニヤンターとして狩りに出される、と」

「そうだニヤ。ボクはそのニヤンターの中でも最強と言われるぐらい強かったのニヤ！……まあホントはボクと同じくらい強い奴が一匹いたんだけどニヤ」

「なるほど。ところでそのもう一匹というのは？」

「一時期一緒に行動してただけで詳しいことはボクもあんまり知らないニヤ。ただ剣の腕は相当ニヤ。なぜか木刀で尻尾切断してたし……」

「ふむ、それは是非とも一度触っ……こほん、戦ってみたいですね！あ、そういえば——」

そこには、さつきからこちらことなどまるで眼中に無いゼヒヤツハ——と言わんばかりにニヤンターと戯れるセイバーの姿があった。

「——それに、少なくともあっちの方は戦う気はゼロみただけど？」

「~~~~~！？と、とにかく！そんな甘いこと言ってると容赦無く倒すから！あとそこ！なに呑気に楽しく語り合ってるの！？」

「……………ねえ？お話は終わり？」

遠坂が顔を赤くしながら怒鳴っていると、突然後ろから声が聞こえた。

そちらを振り返ると——

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

——白い少女と巨人が立っていた。

く士郎 side outく

「初めまして皆様。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アイ  
ンツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン……」

丁寧に戻るとの端を持ってお辞儀をする少女。その少女の口にした名前に聞き覚えがあるのか、凜の表情が強張る。

「挨拶はもういいよね。どうせ皆ここで死んじやうんだし」

そう少女が言うと、後ろに控えていた巨人がゆっくりと前にでる。

「やっちゃえ、バーサーカー！」

[  
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■  
| | | | | | |  
! ! ! ! ! ]

そして雄叫びと共に、猛然と士郎達に向け突進した。

「下がってください、シロウ！」

セイバーが前に出てバーサーカーを迎撃する。その力は最優の名にふさわしく、バーサーカーと拮抗している。だが、やがてバーサーカーに押されはじめ、ついに弾き飛ばされてしまった。



「セイバー!？」

「ニヤんと……大タル爆弾三つでコゲ目すらつかないとは。さすがにシヨックニヤ」

「あは、勝てるわけじゃない。私のバーサーカーはね、ギリシヤ最強のヘラクレスっていう魔物なんだから」

「そんな、ヘラクレス!？」

「そう、貴方達程度が使役できる英雄とは格が違う。最強の怪物なんだから!」

と、少女——イリヤ——は勝ち誇った顔で己がサーヴァントを自慢する。

だがそれも当然だろう。ギリシヤ神話のヘラクレスと言えば、知らぬ者はいないと言っても過言では無いほどの英雄。そんなものを相手に勝つなどほぼ不可能。

凜達の間にも似た気持ちが広がる——

「全員、ブーメラン発射ニヤ!」

——タルトを除いて。

「ふん、そんな攻撃効くわけじゃない。なんたって——」

少女の言葉は続かなかった。なぜなら——

「■■■■■■——!？」

「嘘！？バーサーカー！？」

——あれだけ攻撃してもびくともしなかったバーサーカーの体を、あっさりとブーメランは引き裂いたからである。

「ニヤ、どうやら『貫通ブーメラン』は効くみたいだニヤ。みんな！さらに投げるのニヤ！」

「『『応ニヤ！』』」

タルトは、最初に対峙した時からバーサーカーをさほど脅威には感じていなかった。無論、油断したり相手を侮ったりしているわけではない。

ただ、取り立てて言うほど強敵だとは思わなかっただけである。

二メートル以上の巨体——それがなんだというのだろうか。彼が戦ってきた相手は、軽く数メートルから数十メートルはある巨大な竜種なのである。

攻撃が全く通用しない——それがなんだというのだろうか。竜種の甲殻はとても固く、種類や部位によっては弾かれて全くダメージがいかなないなどザラである。

ギリシャ最強の英雄——それがなんだというのだろうか。火山、凍土、孤島や街。様々な地域の様々な環境で戦ってきた彼が、ましてや怪物を倒した“程度”で英雄などと呼ばれている存在に、遅れをとるはずが無い——

凜  
s  
i  
d  
e  
s

あまりに一方的だった。

あれだけセイバーが攻撃しても傷一つ付かなかったバーサーカーが押されてる。

タルトが戦車を巧みに操り攻撃を避け、荷台にいる他の猫達が投げ  
るブーメランで傷をつけていく。そこに復帰したセイバーがすかさ  
ず斬り付け、ダメージを増やす。

もっともすぐに再生していくみたいだけど、それでもさっきよりは  
格段に状況が良くなった。

「なにをやってるの！？早く蹴散らさない、バーサーカー！！」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■  
 | | | | | | | | | |  
 ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

アインツベルンのマスターが苛立たしげに命令するが、タルト達には避けられ、セイバーには受け止められて、その隙をタルト達に突かれるという悪循環。

そして――

「  
■  
■  
■  
■  
|  
|  
!  
?  
」

「今二ヤ！」

「はあああああつ！」

猫の投げたブーメランがバーサーカーの首を裂き、そこをセイバーが一気に斬り付け——首を落とした。

「バーサーカー……」

アインツベルンのマスターが信じられないという顔をする。

それも当然だろう、私でさえ目の前の巨人が倒れるなんて夢にも思わなかったのだから。

けど現実にはタルトとセイバーによってバーサーカーは倒された。後はマスターの方をどうにかするだけ、そう思った時。

「……驚いたわ。なかなかやるのね、お兄ちゃんのセイバーと凜のライダー？「ニヤンターニヤ」ニヤンター？そう、イレギュラークラスのサーヴァントなのね。まあいいわ。起きなさい、バーサーカー」

そう言うのと、首を落とされて死んでいたはずのバーサーカーが、無傷の状態で立ち上がった。

「うそ……」

「言ったでしょ？バーサーカーはヘラクレスだって。彼は神々に与えられた呪い（しゅくふく）によって、自らが乗り越えた試練の数だけ命を持つ。つまり、バーサーカーを倒すには後十一回殺さないといけないんだよ」

「そんな……！？」

冗談じゃない。あんな化物を後十一回も殺さないといけないなんて。

「けど、今日はそれなりに楽しかったから帰ることにするわ。下手に戦って、後ろにいるあなたの仲間に襲われたら大変なもの。ね？ ニヤンター」

「ぬ、バレてたのかニヤ」

そう言うのとタルトは合図を出し、次の瞬間相手の背後にある電柱から忍者のような格好の猫が飛び出し、良く見ると一匹少なくなっていた戦車の荷台に着地した。

「それじゃまたね。お兄ちゃん、それからニヤンター」

そう言い残して、バーサーカーの主従は夜の街に溶け込むように立ち去っていった。

＼凜 side out＼

#### 第4話：猫、捕獲する。（前書き）

今更ですが、この小説ではたまたMHの用語が碌な説明も無く使われますので注意して下さい。

#### 第4話：猫、捕獲する。

く 士郎    s i d e   

「ねえ、衛宮君。私達と同盟を組まない？」

あのバーサーカーとの戦いの後、一度俺の家に帰って来て居間で寛いでいると、遠坂がそんな話を持ちかけてきた。

「俺は勿論良いけど、なんでだ？さっきは——」

「状況が変わったの。さっきのバーサーカー、あれは別格よ。まず

間違いなく一人じゃ勝てない。だから、バーサーカーを倒すまでは一度休戦して協力しようってわけ」

「なるほど……」

俺が疑問を口に出す前に、遠坂が同盟理由を説明した。

確かにあのバーサーカーは強い、セイバーの攻撃が全く通じてなかった（なぜかニャンターのブーメランは効いてたけど）し、おまけに首を切り落とされてもすぐに再生してたし。正直遠坂達の助けなしに勝てる気がしない。

「それでどう？悪い話じゃ無いと思うけど？」

「ああ、勿論受けるよ。むしろこっちからお願いしたいくらいだ」

「そ、じゃあ同盟は成立ってことで——」

そう言いながら遠坂は振り返り。

「ニャンター！帰るわよ！」

さきほどからホクホク顔のセイバーに抱きかかえられているニャンターにそう言った。

「というかセイバー。さっきの戦いを抜いたら、ニャンターと遊んでばっかりな感じがするのは俺の気のせいかな？」

「了解ニヤ」

「むっ、残念です」

その言葉に、セイバーは本当に渋々といった感じでニヤンターを解放した。

「それじゃ衛宮君。私達は一度帰るから」

そう言い、遠坂は玄関へと歩き出す。

「遠坂、夜道大丈夫か？」

「あなたねえ、こっちはサーヴァントがいるんだから大丈夫に決まってるじゃない」

「あ、そう言えばそうか。じゃあ、気をつけて帰れよ」

「ええ、それじゃ衛宮君。また明日来るわ。」

そう言うのと遠坂は帰っていった。

……角を曲がった所で、鳥の鳴き声と遠坂の叫び声が聞こえた気がするが、気のせいだよな。うん、そうに違い無い。  
あ、そう言えば――

「また明日来るって、どういう事だ？」

作戦会議でもするのだろうか？なんにせよ、明日聞けばいいか。とにかく今日は早く寝よう。

く士郎 side outく

翌朝、凜が衛宮邸を訪れ、士郎にしばらく泊まる旨を伝えたり、その時いつものようにやってきた桜と虎に見つかって一悶着あったりしたが、ここでは割愛する。

くニャンター sideく

旦那さんが、サーヴァントも連れずに学校に来たセイバーのマスターに怒って喧嘩（本人は否定してたけどニヤ）の真っ最中なので、手を出すなと言われたボクは、暇潰しに街を散歩することにしたのニヤ（もちろん霊体化した状態で）。

するとある路地の裏の方から、サーヴァントとレアなアイテムの気配がしたのニヤ。これは狩りに生きる者として行くしか無いニヤ！と思って、ボクはレアアイテムの入手と、ついでに新たなサーヴァントを探るために路地裏へ向かうことにしたのニヤ。

くニャンター sideoutく

タルトが路地裏に到着した時、奥の方では人が襲われていた。凜や士郎達の通う学校の制服を着ていることからその生徒であることが分かる。腕はだらりと力なく垂れ下がり、目は焦点が合っておらず。肌は青ざめ、土気色になり。そして、首筋からは僅かに血が流れている。

「（…これはレアアイテムゲットの後にあの子を助けないといけな  
いかニヤ？）」

と、親切なのか酷いのかよく分からないことを考えながら様子を伺  
っていたタルトに、相手のサーヴァント——足元まで届く、長い  
紫の髪を揺らし、眼帯を付け、やや露出の激しい服を着た女性——  
——が気付いた。

「……………」

「？ どうしたんだライダー。さっさと全部食っちまえよ」

傍らに立つ少年——ライダーのマスターである間桐慎二——が  
促すも、ライダーは微動だにしない。それに慎二は腹を立て、怒鳴  
り散らすもライダーはタルトをずっと見続けている。

「おい！聞いてんのか、ライ」  
『プーギー桃花彗星』「え？」

相手のサーヴァントが硬直しているのを好機と捉えたタルトが、相  
棒のプーギーに乗り、慎二に突進した。

本来、子豚ぐらいの大きさであるプーギーには攻撃力は無いに等し  
く。故にこの宝具の使用法は、陸空を自由に移動できる利点を生か  
した攪乱、離脱である。  
ただしそれも——

「ぐばあっ！？」

——サーヴァントが相手なら、の話である。

超高速で飛んで来たプーギーの突進を、ただの人間である慎二が耐えられるはずも無く。そのまま奥の暗がりまで豪快に吹き飛んでいた。

「さて、レアアイテムもゲットできたことだし。ボクとしては帰りたいけど……戦うつもりなら相手になるニャよ。ライダー」

ちゃっかり慎二からレアアイテム（謎の本）をぶんどったタルトは、自身の背後に立つライダーに声をかける。

「……いえ、戦いはしません。それより、一つ確認を取りたいことがあります」

「確認？なんニャ？」

「撫でてもいいでしょうか？」

「……………ニャ？」

~~~~~

その後「……別に構わないけど、とりあえずその子死にそうだから先に治させてくれニャ」「ええ、どうぞ」という会話を経て、死体二分前状態の少女（本名：美綴綾子）は、ようやく治療されることとなった。

「と言っても、ぶつちゃけ薬を飲ませるだけなんだけどニヤ。『謎
ニヤンター・ポーチ
多き小箱』」

そう呟くと、タルトは腰に下げたカバンに手を入れ、ガサゴソと何かを探し始めた。

「えーっと、あった。これニヤ」

やがてカバンから黄色い小瓶を取り出し、その中の液体を少女改め綾子の口に流し込む。いくら零れたがそれでも飲ませていき、中身が空になったところで瓶をしまった。

すると綾子の体が光り、首の傷が塞がって、血色もよくなった。

「とりあえずこれで大丈夫ニヤ。ところで「おい！ライダー！」…ニヤ」

「お前なに突っ立ってるんだよ！？その猫をさっさと殺せよ！」

「……………」

綾子に秘薬を飲ませ、ライダーに詳しい話を聞こうとしたところで奥の方から慎二が怒鳴り込んできた。

だが、声を張り上げる慎二に対して、ライダーは無言を貫く。その態度に腹を立てたのか慎二はますます大きな声で怒鳴った。

「何してんだライダー！僕の言うことが聞けないのかよ！？僕はお前のマスターなんだぞ！その鬱陶しい猫さっさと殺せよ！」

「いいえ、シンジ。『偽臣の書』を奪われた今、あなたはもう私の

マスターではありません」

「はあ！？なに言ってる——って無い！？本が、どこにも無い！」

「もしかして、本ってこれのことかニヤ？」

ライダーの言を受け、初めて自らの手に本が無いことを知った慎二は、タルトの取り出した本を見て顔色を変える。

「そ、それを返せ！」

「断るニヤ」

「なっ！？クソッ、猫の分際で調子に乗るな！それは僕の物だぞ！？ライダー、そいつから本を取り返せ！！」

「断ります。先ほども言いましたが、今のあなたに私への命令権はありません」

「なんだと！？ふざけるなよ！僕は間「食らうニヤ！閃光玉」ぎゃあ！？目が、目があっ！」

「後はタルを置いて、ライダーちょっと手伝ってくれニヤ」

「分かりました」

突然視界を覆ったまばゆい光に、目を押さえて叫ぶ慎二の背後に回ったタルトは。大きな樽を置き、ライダーと共にそれに慎二を縛りつけた。

「ちよつ、おい！なにしてんだよ！？ライダー！お前まで！！」

「残念ながらシンジ、今の私のマスターはこの猫です。ええ、本当に残念ですがおとなしく縛られて下さい」

「嘘つけ！？お前ものすごく嬉しそうじゃ「点火！」アー……ッ……」

点火された樽は慎二をつけたまま、くると回転しながら空へ昇り、爆発した。

「……さてと、とりあえずボクは旦那さんの元に帰るけど、ライダーは「ついて行きます！」ニヤ。じゃあ霊体化して付いて来てくれニヤ。詳しい話はまた後でニヤ」

「分かりました」

そう言うと同時にライダーは霊体化し、それを見たタルトはプーギーに乗って凜の元へ向かっていった。

綾子 side

「ん？ここは……」

私は慎二に呼び出された後、連れて来られた路地で目を覚ました。

「っ、あいつらは！？……ってあれ、いない？」

慎二の他にもう一人誰か現れて、襲われてそれから――

「ダメだ、思い出せない」

頭に靄でもかかったみたいにぼーっとする。

「特に傷とか無いし、夢……だったの、か？」

いまいち釈然としない思いを抱きながらも、早く帰ろうと思い、私は路地を後にした。

（綾子 s i d e o u t）

その夜。とあるニュース番組にて、空での謎の爆発と、黒焦げでボロボロになった少年が都内の病院に運ばれた。というニュースが流れたとか何とか。

第5話：猫、空気。（前書き）

長々と空けてしまい、申し訳ありません。

短い上に駄文ですが、良ければ見てやってください。

追記：感想を、一部受け付けることにしました。
批判等ありましたら、お書きください。

第5話：猫、空気。

——聖杯戦争。

手にした者の望みを叶えるという万能の願望器——『聖杯』を巡り、七人の魔術師^{マスター}が、七騎のサーヴァントを用いて繰り広げる争奪戦。

聖杯は、自らを持つに相応しい人間を選び、競わせ、殺し合い、ただ一人の持ち主を選定する。

サーヴァントとは、伝説の英雄が、聖杯によって受肉化されたもの。彼らは基本的に、霊体としてマスターの側にいるが。必要とあらば実体化させ、戦わせることができる。

これだけの奇跡を起こす聖杯ならば、持ち主に無限の力を与えよう。

当然。マスターとして選ばれた者たちは、己が聖杯の所有者となるべく、血みどろの争いを繰り広げていることだろう――

「サクラ、おかわりを」

「分かりました。……はい、どうぞセイバーさん」

「ありがとうございます」

「先輩もいかがですか？」

「ああ、それじゃ頼む」

「はい」

「旦那さん、そっちのやつ取ってくれニャ」

「（これ？はい、ニャンター）」

「（ありがとニャ）」

「（ニャンター。醤油は使いますか？）」

「（いや、ライダーが先に使っているニヤ）」

「（では先に）」

—— お前らもつと緊張感持て。

く士郎 sideく

昨日、俺が遠坂の襲撃をなんとか切り抜けて和解し、家に帰つてくると。

居間にニャンターと遊ぶライダーがいた。

新たなサーヴァントの登場に一瞬身構えたが、ニャンターに宥められ、ひとまず席に着いた。

そして説明を受けている途中で、桜と藤ねえがいつものように訪ねてきたので、話を切り上げ。ライダーを、凜の遠い親戚ということにして紹介した（その際、虎は吼えながら走り帰っていった）。

その夕食後、桜がいきなりしばらく家に泊まると言い出したため、一悶着あったけど、最終的に桜は泊まることとなり、今朝、荷物を持って家に来た。

虎は相変わらず吼えてたが、無視されたので、また走って帰ってい

った。

明日の朝飯は、藤ねえの好きな物を作ってやろう、と思った（まる）

（士郎 side out）

その夜。

暗い街中を、屋根から屋根へと飛び移りながら疾走するセイバーの姿があつた。

やがて彼女の前方に、柳洞寺と呼ばれる寺が見えてきた。

その山門へ入って行く人影——フラフラとしながら、まるで操られているかのように歩く士郎の姿——があつた。

夜中に突然姿を消した士郎を、ラインの繋がりだけを頼りに追いかける、ようやく見つけたことに安堵するも。

士郎の様子と、キャスターの根城である柳洞寺に入って行ったのを見ると、さらに加速した。

柳洞寺へ続く石畳の階段を駆け上がっていると、目の前に立ちふさがる者がいた。

胴着を着こみ、袴を穿き、群青の陣羽織を羽織っている。

藍色の長髪は、後頭部で一纏めになっている。

そして、その右手には異様な長さの刀が一本、握られている。
時代劇に出てくる、侍のような格好をした男が、そこにいた。

「お前は？」

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

「！？」

名乗りを聞いたセイバーは驚愕した。目の前の英霊の名前にはなく、真名をあつさりとバラしたことに、である。

「……参りました。名乗られたからには、こちら名乗り返すのが騎士の礼です。

小次郎と言いましたね。アサシンのサーヴァントよ、私の名は――」

「――よい」

名乗り返そうとしたセイバーを、アサシンが遮った。

「名乗れば、名乗り返さねばならぬ相手であったか。いや、無粋な真似をしたのは私の方であったか」

言いながら、アサシンはゆっくりと階段をおりてくる。

「真名など知らずともよい。我らにとって、敵を知るにはこの刀だけで十分。

元よりサーヴァントとは、そういうものであるう。

――違うか、セイバーのサーヴァントよ」

「……なるほど、確かにその通りです」

そう言うのと同時に、セイバーは後ろに飛び退いて間合いを開けると、剣を構え――

「それでよい。では、果たし合おうぞ、セイバー」

――そして、二人同時に踏み込んだ。

くおまけ・アサシン没ネタく

柳洞寺へ続く石畳の階段を駆け上がっていると、目の前に立ちふさがる者がいた。

胴着を着こみ、笠を被っている。

深い青の毛並みは、綺麗で、とても手入れが行き届いている。

そして、その右手には『鯉節』と彫られた木刀が一本、握られている。

ユ○モ村に出てくる、旅人のような格好をした猫が、そこにいた。

「あ、あなたは!？」

「アサシンのサーヴァント、小次郎ニヤ！」

く
了
}

閑話：蟲、駆除。（前書き）

以前書いていたネタを投稿します。

酷いご都合主義とキャラ崩壊が起こります。注意してください。

閑話：蟲、駆除。

〈ある日の衛宮邸〉

夕食後、自室で寛いでいる凜のもとに、タルトが近づいて来た。

「旦那さん」

「ん？ 何、タルト？」

「こんなの見つけたニヤ」

「どれどれ——って、何その蟲!？」

タルトが差し出したのは、何とも形容し難い、数匹の蟲であった。
どこことなく、困惑しているようにも見える……。

「ちょっと、どこにいたのよそれ」

「さっき台所で“盗った”のニヤ」

蟲の居所を聞き出す凜に対して、タルトはそう言いながら台所の方を指差した。

「今すぐ捨てて来なさい。——いやむしろ焼却して」

「了解ニヤ」

そう言つてタルトは、外へと駆けて行つた。

凜 side

「はあ、タルトのあの癖も困つたものよねえ……」

私のサーヴァントであるタルトは、よく「拾つた」と言つて妙なものを持ってくる。

この前も、なんらかの概念武装と思われる黒い球みたいなのを拾ってきたし。

本人曰く「ニャンターの性ニヤ」とのことだが、少しは自重して欲しい。

しかし、今回に限ってはその習性（？）が役に立ったといえる。

タルトの持ってきたあの蟲。すぐに焼却を命じたため詳しくは分らなかったが、おそらく他のマスターの使い魔だと思う。

偵察か、あるいは他に目的があるのか……。なんにせよ後で家の中に異常が無いか調べないといけない。

「遠坂。風呂沸いたけど、先に入るか？」

「ええ、そうするわ」

ま、お風呂の後でもいいか。

＼凜 side out＼

＼???? side＼

あ、ありのまま今起こったことを話すぞ。

『僕は桜の中に寄生していたのに、いつの間にか猫に啜えられてい

た
『

な、何を言っとするのか分かんと思うが、僕も何をされたのか分かんかった。

頭がどうにかなりそうじゃった。宝具とか、ギャグ補正とか、そんなチャチなもんじゃあ断じて無い。

もつと恐ろしいご都合主義の片鱗をm「点火ニヤ！」ギャアアーーッ！！？

｝???? side out ｝

かくて、冬木の平和は守られたのであった(まる)

追伸：間桐臓硯、志半ばで戦闘^{リタイア}不能。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3745q/>

オトモは大変な戦争に召喚されたようです

2011年8月31日20時46分発行